

第 2 章

地域に開かれた学校
への取り組み





地域の人々と学園の関わり

1964（昭和39）年に南生実町に移転してから60余年、本学園は地域に開かれた学校として親しまれてきました。地域の方々は、駅至近の学園の中を自由に通行することができ、災害時には地域の避難所となり

ます。

また、1章などで述べたように、1998（平成10）年から短期大学の校舎内に親子を迎え、子育て支援活動も行っています。

地域に開かれた取り組みは、これからも積極的に展開していく予定です。

この章では、2023（令和5）年11月から短期大学の校舎ではじまった「イーグル・アフガン明德カレッジ（EAMC）」の活動を紹介します。

* 正式なスタートは2024年4月

アフガニスタン人女性が学ぶ日本語教室

土曜日の午前10時。短期大学に子どもを連れた女性たちが、ヒジャブとよばれる色とりどりの大きなスカーフを頭にかぶり、次々とやってきます。

「サラーム (salam)」

これはダリー語のあいさつで英語の「ハロー (Hello)」のように使います。ダリー語はアフガニスタンの言語でイランではペルシャ語と呼ばれます。

アフガニスタンでは2021（令和3）年に20年にわたり駐屯していたアメリカ軍が撤退し、それとともに民主主義政権が崩壊、極端なイスラム原理主義を取るタリバーンが政権を掌握しました。この混乱によって多くのアフガニスタン人が国外に脱出し、日本にも大勢の人が迫害を逃れてきました。

しかし、特に家にこもりがちな成人女性は日本語がまったくわからず、子どもの保育園や学校で先生が何をいつているのか理解ができないなど、生活に大きな困りごとが生じています。そこで、彼女たちのために無料の日本語教室を、短期大学の教室を利用して開くことになりました。

クラスは上級・中級・初級の3つ。それぞれ担任の日本語教師が指導

しています。お母さんたちが学んでいる間、子どもたちは1階の教室や隣接する短期大学附属幼稚園の園庭で、託児ボランティアの人たちと遊びます。

1週間に1回、2時間の日本語教室には30〜50人ほどのアフガニスタン人の女性が集まり、日本語能力試験に合格する人も増えています。アフガニスタンで医師だった女性は最高レベルのN1（N5〜N1の5段階）を取りました。

異文化の避難民を支援する人たち

この「イーグル・アフガン明德カレッジ（EAMC）」を運営するのは、NPO法人イーグル・アフガン復興協会理事長の江藤セデカさんです。江藤さんは1983（昭和58）年、日本人との結婚を機に来日しました。アフガニスタンは、1978（昭和53）年に旧ソビエト軍が介入し共産政権が成立。アメリカなど西側諸国の介入で1989（平成元）年に撤退しますが、むしろ国内は混乱しタリバーンが結成されます。

2001（平成13）年に「9・11」（アメリカ同時多発テロ事件）が起これと、その首謀者がアフガニスタンに潜伏しているという理由で、翌2002（平成14）年、今度はアメリカ軍が侵攻しました。戦争が起これるたびに一般市民や子どもたちは家を焼かれ、食物が不足します。江藤

さんは、2003（平成15）年にNPOを立ち上げ、アフガニスタンに不足物資を送り、復興に必要な学校を建設する活動をはじめました。



初級の授業の様子

「もともと千葉には、アフガニスタン人のコミュニティがありました、2021年のアメリカ軍の撤退でさらに多くのアフガニスタン人が日本にやってきました」と江藤さん。

現在、日本には約5600人のアフガニスタン人がいて、およそ半分の約2300人が千葉県内に住んでいるといえます。江藤さんから、アフガニスタン人女性の日本語教室のために校舎を貸してほしいと頼まれた福中先生は、即座に快諾、EAMCが実現しました。

厳格なイスラム文化では、女性は家の中にいるものとされ、夫や親族以外の男性と話すことはできません。成人女性が髪を隠すヒジャブをかぶるのもイスラムの戒律です。日本にきて初めて1人で電車に乗る女性

もしました。江藤さんは、日本語教師もすべて女性にして、日本語教室に参加しやすいように図りました。

受付や運営はジャーナリストでNPO法人理事の野口壽一さんや、アフガニスタン研究者の関根正男さんが手弁当で手伝っています。託児ボランティアの古屋まゆみさんは、テレビでアフガニスタンのニュースを見て、自分も何か手伝いたいと江藤さんに連絡を取りボランティアをはじめました。

福中先生も毎週参加し、託児所で「センス・オブ・ワンダー」の授業をするなど遊び相手をしています。福中先生はこう話します。

「将来は、この子どもたちに英語や算数、母国語を教えるような教室を

ばい
いね」

